

平和なエコ・エコノミーの創造

藤 岡 惇

「……生きている人だけの世の中じゃないよ。生きている人の中に死んだ人もいっしょに生きているから、人間はやさしい気持ちをもつことができるのよ。ふうちゃん。」

（灰谷健次郎『太陽の子』）

「……近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於いて論じたい。世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない。自我の意識は個人から集団・社会・宇宙と次第に進化する。……正しく強く生きるとは、銀河系を自らの中に意識してこれに応じていくことである。」

（宮沢賢治『農民芸術概論綱要』）

1. 「自然のミレニアム」にむけて

キリスト誕生から最初の千年紀（ミレニアム）の間、とくに欧州では人間の生命と能力とは、全能の人格神に帰属しているとみなされていました。人間は、いわば外部の全能者にかしづく下僕となりましたので、「神のミレニアム」といってよい千年間でした。

第2のミレニアムに入ると、「神の専制」への反発から人間復興運動がおこり、しだいに人間が神にとってかわるようになりました。人間は自らを自然環境の外におき、自然を支配と征服の対象だと考えるようになったのです。こうして第2の千年紀は、しだいに「人間のミレニアム」という色彩を濃くしてい

きました。自己（自分の脳）を中心として、世界が回っているという観念的な天動説のような考えに染まるようにもなりました。その結果は、自我のエゴ化と精神病理の蔓延^{まんえん}、核戦争、地球環境の危機でした。

第3のミレニアムの課題とは何でしょうか。あらゆるイノチ（生命）が輝かないかぎりには人間のイノチも輝けない世紀、「万物の霊長」にふさわしく、地球環境全体をケアする義務を人間が引き受ける世紀になることだと、私は考えています。ジョン・レノンは、『イマジン』という歌を作曲し、「想像してごらん。神様なんていないってことを。そして皆が平和に暮らしていることを」と歌いましたが、レノンが望んだように「神のミレニアム」と「人間のミレニアム」双方の弱点を補正した「自然のミレニアム」への転換が望まれているのです。

そのための「自然体の経済」をどう創ったらよいのでしょうか。次の4つの問題を解決していくことだと思います。

第1に、環境破壊による人類の緩慢な大量死を避けることです。今日の人類は、二酸化炭素を炭素換算で年間72億トン排出していますが、そのうち、森林や海洋など自然が吸収してくれるのは31億トン程度。残る41億トンは大気中に滞留し、温暖化を促進しています。気候を安定させようとする、年間排出量を30億トン以下に下げなければなりません。2050年までに排出量を半分にすることが最低限の責務となるでしょう。ただし過去百年の間に大量の二酸化炭素を排出してきた先進国が、まず率先して排出量の1/3化を達成し、発展途上国を排出量の大幅減にいきなっていくほかないでしょう。

発展途上世界の絶対的な貧困と人口増を考えると、地球上で生み出す富の総量については、2倍程度に増やす必要があるでしょう。二酸化炭素の排出量を半分にしながら富の生産量を2倍にするには、化石エネルギーあたりの富の生産性を4倍に引き上げる必要があります。先進国のばあい、より高い目標——化石エネルギーあたりの生産性のほうを6—8倍に引き上げるという目標を掲げ、率先して挑戦していくことが求められます。労働の生産性の安易な上昇は大量の失業者を生み出すだけ。「人間を失業させるのではなく、エネルギーの

ほうを失業させる」エコ産業革命が実現できるかどうかにかんして人類の未来がかかっているのです¹⁾。そのためには、大量のエネルギーが必要な「モノ」の生産を減らし、エネルギーを余り使わずに生産できる「サービス財」の比率を高めていくことも大切となるでしょう。モノの豊かさの追求はほどほどにして、コト（関係）の豊かさ、ヒトの豊かさ、自然界のイノチの豊かさや自由時間の豊かさの方を追求する。「おいしいモノを食べたい」から「おいしくモノを食べたい」への転換です。

第2に、無差別のテロ、これにたいする国家テロや戦争の応酬といった、憎悪と暴力の悪循環を何としても避けるという課題です。日本海沿岸だけですでに70基を超える原子力発電所が操業しています。チェルノブイリ級を凌駕する超大型の原発が多いのが特徴です。もし米国軍と北朝鮮軍とが戦端を開けば、超大型原発の炎上は避けられないし、すさまじい破局となることは明らかでしょう。人類が戦争を絶滅しないかぎり、戦争のほうがかんして人類を絶滅させてしまう——そんな時代が、なお続いています。

第3に、国境を越えたマネーの暴走が貧富の格差を拡大し、「百年に一度」という金融恐慌をひきおこしつつありますが、これにどうストップをかけるかという問題です。マネー移動のグローバル化のなかで、労働・人権・環境基準の最底辺への切り下げ競争が激化し、世界では労働人口の1/3にあたる10億人が失業ないし半失業状態になっています²⁾。日本でも、生活への不安が消費不況を激しくし、新たな紛争の火種となっています。若者や失業者に働きがいのある仕事を保障したり、市民としての尊厳を保障する生存保障制度を整えないかぎり、消費不足におちいり、デフレ不況の解決は難しいでしょう。

最後に、人間の人格とアイデンティティの危機です。わが国でも、精神を患う人、自殺や自傷に走る人、閉じこもりやストーカーが増えています。自分とは何であるかが分からなくなり、地域社会と大地、宇宙に根を下ろせなかった「孤独な頭脳」が、悲鳴をあげているのです³⁾。どのようにして脳を再び体に埋め戻し、心身を家族・地域社会、さらには文化と自然のエコロジー秩序に埋め込んでいったらよいのか、という課題を解決する必要があります。

以上の4つの課題をトータルに解決していくには、どうしたらよいのでしょうか。世界中の人々がそのことを考えています。ただし人間とは弱い者であり、貧しい社会になるほど、道徳の説教だけでは、世の中は変わりません。「そうしたほうが得する」というしくみ、いわば「徳が得になるような経済システム」を形成することが必要なのです。経済学の役割は重大ですね。まずは、そもそも「経済」とは何であり、どうしてこのような問題が生まれてきたのかを考えてみたいと思います。

2. 自然のなかから社会が生まれた

「……私たちが、[万物の霊長たるにふさわしい] 雅量をもつようになるとき、…私たちには…「高貴な身分には義務が伴う」ことを片時も忘れない者のもつ威厳が回復されるでしょう。」

(E. F. シューマーハー 『スモール イズ ビューティフル』)

「イノチ」の尊厳，人間の尊厳

ここで、手をかざしてください。手を光にむけてかざしてください。手の先、指のあたりがキラキラときれいに輝いていますね。この手を生物の進化図にたとえますと、人間はどこに位置しているのでしょうか。

話は、137億年前のビッグバンの直後にとびます。当時の宇宙には、もっとも単純な元素——水素とヘリウムしか形成されていませんでした。核融合を起こして、より複雑な元素をつくりだすためには、大変な高熱がいるからです。約38万年後の「宇宙の晴れ上がり」をへて、ビッグバンから3億年がたった頃に、最初の天体——原始星や原始銀河が生まれたといわれます。このような軽いガスからなる原始星の内部で進行する核融合反応のおかげで、炭素・シリコンといった重い元素が生み出されました。これらの元素は、原始星の崩壊・拡散とともに宇宙空間に放出され、もっと重い星を形成する材料となりました。

そして第2世代の重い星の最後を飾る「超新星」型大爆発の際に、もっと複雑な原子核をもつ金や銀が生み出されたといえます。超新星爆発直後の周辺空間に現れる元素の成分比は、人体を形づくる元素の成分比とほぼ同じ。爆発直後の周辺空間の元素を集め、収縮させていくと人体ができるそうです⁴⁾。不思議だと思いませんか。

幾度となく繰り返される「宇宙の陣痛」のなかから、原子の結合体たる分子が生まれ、そしてその土台のうえに分子の有機的結合体（有機物質）が生まれてきました。そして地球上の海のなかで、36億年近くまえに最初の生命体（イノチ）が生まれたといえます。原始の海の「生命スープ」の成分は、人間の胎児が浮かぶ母体の羊水の成分とほぼ同じというのも、不思議な符合です。

さてその後の26億年間、細胞分裂というかたちでの無性生殖³⁾が、生命の繁殖の唯一の方法でした。そこでは個体の死はありません。雄と雌とが互いのDNA（遺伝子コード）を交じり合わせ、子を生み出すという有性生殖がはじまって、個体の死が始まりました。高等生物たちは、セックスの喜びを味わう代償として、死の恐怖を味わうようになったのです⁵⁾。

それはともかく、有性生殖の積み重ねのなかで、子供に引き継がれるDNAは高度で複雑なものになり、その精華として人類が誕生します。生物の進化の歩みを手で表したばあい、その最先端の指先のところに、「自然がついに自身自身の意識にまで到達している存在」を生み出したのです。

一人の人間のなかに60兆の細胞がすばらしい協同の活動をして、人間活動を支えています。よく生物学者は、「人間とは36億年のDNAだ」と述べますが⁶⁾、一人のなかに含まれるDNAの総延長は、1080億キロ——地球と太陽を360回往復する長さになるといいます⁷⁾。ビッグバン直後の水素とヘリウムしかない状態から、宇宙の物質系は、ここまで進化をとげたのです。

イノチはなぜ尊いのでしょうか。わけても人間のイノチは、なぜ尊いのでしょうか。60兆の細胞が、1千億キロ余のDNAに導かれて、自らの力で宇宙の最高の精華としての光を発しているからです。137億年の歳月をかけて、宇宙自身が幾度とない陣痛の苦しみに耐え、腹を痛めて、ついに自らの姿を捉える

眼と耳をつくりだした。——まさにその眼や耳にあたる部分が、私たちだからではないでしょうか。指先を切り落とす際には、痛いという感覚が生まれますね。戦争とは人指し指と中指とが争い、傷つけあっているようなもの。たとえ敵兵であっても、殺そうとするとき、心が傷んでくるのはそのためなのです。

3. 社会のなかから市場経済が生まれた

「経済のない道徳は寝言である。しかし道徳のない経済は犯罪⁸⁾である」
（二宮尊徳）

社会からの政治と経済の分離

人間は、200万年ほど前に2本足歩行をするようになり、社会を形成するようになりました。1万年ほど前の農業革命の時期に社会からの最初の大分裂が発生し、職業的な兵士と官僚が生まれ、政治（国家）というものが生み出されました。戦争という組織的な殺戮戦を人類が始めたのは、たかだか1万年前にすぎません。

500年ぐらい前に、社会から第二の大分裂が発生し、「モノづくりと分配」（経済）の領域が枝別れして、「市場経済」という独自の論理で動く不思議な魔物が生み出されます。政治（国家）と経済（企業・市場）が枝別れしてしまった後の「社会」には、消費（人づくり）と余暇（学習・文化）の活動しか残りませんでした。マネーを稼げない「影のような仕事」の場に、社会は変質し、格下げされ、もっぱら女性が担当するようになりました。

このような枝別れのプロセスの歴史的動きを示したのが、図-1に示した人間社会の系統樹です。自然・社会・経済・政治というファクターは共通した根をもっているにもかかわらず、現代では相互に無関係なファクターであるかのように分立しあっていることがわかります。ちょうど大学のなかの学部間の関係みたいですね。

図-1 人間社会の系統樹

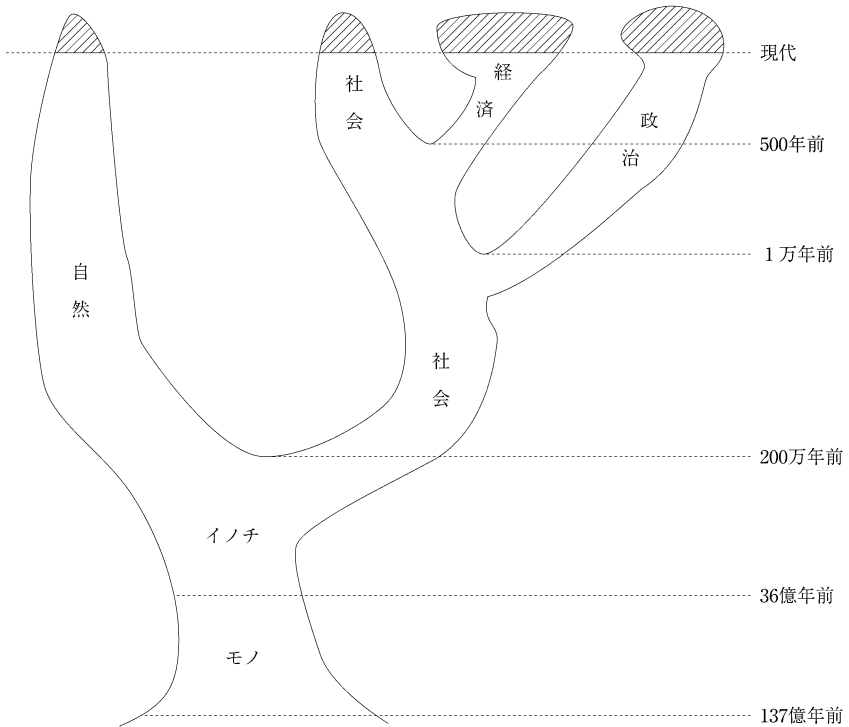
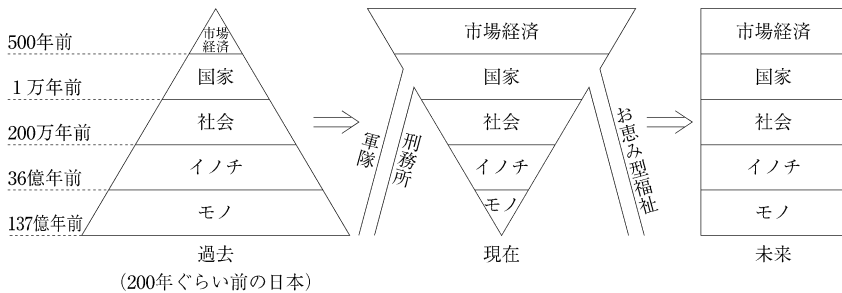


図-2 モノ・イノチ・人間社会・国家・市場経済の捉えかた



同じプロセスを描いているものの、モノ、イノチ、人間社会、政治、市場経済という5つのファクター相互の比重関係にどのような変化が生まれてきたかという視点にたって図示したのが、図-2です。

近代資本主義の発展とともに、パワーと資源とは、どんどん自然から社会へ、そして経済に吸い上げられ、元来正三角形の形をしていた人間社会が、中央部のような逆三角形の形に変容していきました。このような逆三角形の形は、不安定であり、どうしてもグラグラしやすい。そこで国家による安定装置——軍隊と刑務所、および自尊心・自立心を損なう「お恵み型福祉」といった「つかえ棒」で支える必要がでてきました。人間は慎みを忘れ、やり過ぎたのです。その結果、自滅する1歩手前まで来てしまったというわけなのです。

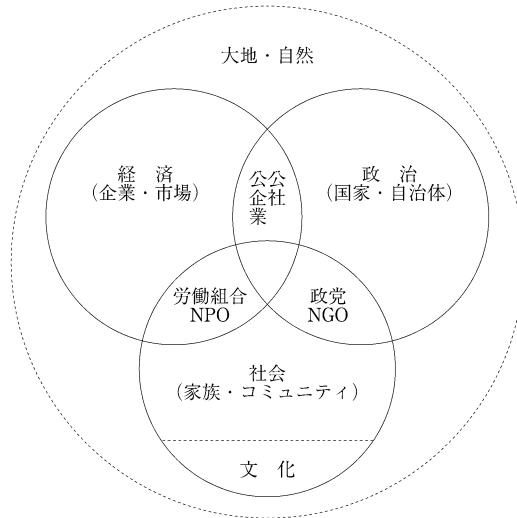
このようなしだいで、「人間のミレニアム」をどう「自然のミレニアム」に転換するか。「自然の掟」^{おきて}に従う方向で、どのようにして人間法と社会システムを作り直したらよいか、生命体のルールにしたがって、どのような都市をつくり、地域をつくり、経済をつくっていったらよいか、21世紀最大の課題となってきました。図でいうと不自然な逆三角形を右側のような四辺形に変える課題に直面しているのです。⁹⁾経済と政治が吸い上げてきた資源とパワーとを、産みの親たる社会領域や自然領域に戻し、バランスを回復していくことが不可欠となってきたわけです。「放蕩息子^{ほうとう}が羽をうちからして父母のもとに帰る」という聖書の説話どおりにです。

自然・経済・政治・社会の4領域の相関

これまで人間社会を歴史の流れのなかで見てきましたが、この流れを現時点で固定し、輪切りにしてみましよう。そうすると人間の24時間の生の営みは、「経済」、「政治」、「社会・文化」という3つの領域、および人間活動の土台としての「大地・自然」との関係からなっていることがわかります。これら4領域の相互関係を描いてみたのが、次の図-3です。

「大地・自然」とは、万物を進化させ、イノチを生み出す場のことです。ヒトというのは、葉っぱ一枚・細菌1つ、みずからの力で生み出すことはできま

図-3 人間活動の4領域の相関



せん。できることは自然進化の産物であるイノチを加工するくらいのこと。下手に手を加えると、狂牛病や花粉症、氷河の融解などを招きますので、自然順応型の「里山」文明をつくるのが大切となります。

「経済」とは、モノ（さらにはマネー）を生み出し、配分する場です。現代では、市場と企業が主な担い手となり、もうけ追求原理が支配しています。

「政治」とは、モノ・ヒトの管理・防衛のために、コト（関係・ルール）を生み出し、調整する場です。政府や自治体が担い手となり、公共性の原理にもとづいて運営されています。

「経済」、および「政治」（とくに軍事）という領域は、凶暴な自然や敵兵をあいとして、がぶりと組み合った真剣勝負の世界。相手の動きにあわせてこちらの動きも決まってくるという意味で、「必然性」が貫きやすい世界となります。その証拠にどの民族も、農具・運搬手段や武器については、似かよったものしか生み出せていません。真剣勝負の世界では、「遊び」や「空想」といった観念の自由な展開を許すゆとりがないからです。経済や軍事の領域の人間行

動は予測がつきやすく、数式で表わしやすいのはそのためです。

これにたいして、政治と経済とが枝別れた後の「社会」というのは、モノの消費を介してヒトを生み出し、後継者を育てる場に縮小してしまいました。この領域は、金もうけとは結びつかないことから、女性の仕事とされてきた経緯があります。真剣勝負の仕事が終わった後のモノの享受＝消費の場であることから、「遊びの余地」が大きく、民族ごとに多様・多彩な活動を展開しているという特徴もあります。

この「社会」領域のなかにあつて、人生体験を反省し、より良い生き方（より真実に近く、より美しく、より正しい生き方）を探求し、その成果を表現し、同胞に伝達する営みのことを「文化」（学問・宗教・芸術）と呼んでいます。何のためにかといえ、ば、「ヒトは何のために生きるのか」、「わが人生の目的とは何か」という問にたいする答えを探しだし、これを表現し、伝達するためにです。もっとも自由度が高い活動だといってよいでしょう。

以上をまとめますと、「自然」とは万物のイノチづくりの場、「経済」とはモノづくり（と分配）の場、「政治」とはコトづくりの場、「社会」とはヒトづくりの場、「文化」とはヒトの目的（志・夢）づくりの場と覚えておいてください。

フランス革命の際に、フランス人たちは、革命を導く3つの価値として、「自由・平等・友愛」を強調したことがあります。これら3大価値に託していますと、経済とは「自由」原理の支配する世界、政治とは「平等」原理の支配する世界、社会（枝分かれ後）は、「友愛」原理が支配する世界になるべきだと考えられたのです。この伝でいうと、文化は「真善美」原理が支配する世界、大地・自然は、「多様性」原理が支配する世界になるべきなのでしょう。このように領域が異なれば、追求すべき価値もまた変わってきます。友愛（無償のボランティア）原理が支配すべき「社会」領域に自由な利得追求という経済界の原理をもちこむと、出生率が低下したり、立派な後継者が育たないなどの不都合が生まれます。政治の世界を経済の原理で運営しようとする、利権と汚職がはびこり、機能不全に陥ることでしょう。

人間活動を一台の自動車にたとえてみましょう。「経済」はエンジン、「政

治」はハンドル、「社会」はブレーキ、「文化」はカーナビ装置にあたります。「大地・自然」は、さしずめ自動車を走らせる道路でしょう。巨大なエンジンを備えたブルドーザーが制御不能に陥り、道路たる自然を削り取り、ガードレールを破壊しながら、地響きをたてて暴走している状態——それが今日の人間活動の実態ではないでしょうか。いずれにせよ、エンジン部分（狭い経済の領域）だけに視野を局限していると、自動車の全体的な姿も道路も見えなくなってしまうことに注意してください。

資本主義国のタイプの違い

経済、政治、社会・文化、大地・自然の4つの領域の組み合わせかたによって、同じ資本主義国といっても、そうとうの質のちがいが生まれてきます。たとえば、アメリカ型の資本主義のばあい、経済（市場）領域がもっとも強い影響力をもっています。閣僚たちは、経済界の代表が任命されることが多いですし、政治の世界にも市場の論理が貫きがちとなります。また社会（ヒトづくり）も経済の論理で左右されることが多くなります。

他方、日本や東アジア諸国のような「開発独裁」タイプの資本主義のばあい、国家と官僚機構が主導的な役割を果たしてきました。国家が強力な窓口指導と産業政策をとおして、経済領域を指揮し、支援することが多くなりますし、検定教科書などとおして、ヒトづくりの領域にも影響力をふるいます。

これにたいして、北欧型の資本主義のばあい、社会・文化領域が相当に自律的な活動を展開し、他の領域のありかたに大きな影響力を発揮しているのが特徴です。北欧型の社会では、「社会・文化」部門が発展し、NPO・NGOの旺盛な活動を生み出し、国家権力と企業権力の暴走を、監視し、抑制する力を育んできたのです。この地域では、同じ資本主義国でありながら、民主主義がかなりの程度、根付いています。国政選挙の投票率は、米国のばあいは3割から4割台ですが、北欧諸国のばあいは、7割から8割に達することが普通です。

これとは別に、人間社会のありかたは、その社会が大地・自然とどのような関係を取り結んでいるかによっても大きく左右されるでしょう。封建制度の解

体過程で、どれほど徹底した土地革命が行われ、土地資産の民主的な再配分が行われたか。その結果、大地のなかに、どれほど大量の微生物とミミズが生息し、健康な動植物を育み、健康な心身をもつ住民を生み出しているのか。都市住民も、どの程度、家庭菜園を保有し、大地・自然との有機的な関係を保った生活を送っているか——これらの指標いかんで、社会関係の質（住民の健康度、社会関係の平和度）は大きな影響をうけるからです。

戦後の日本で「構造改革」の必要が議論された時代が2度あります。一度目は1960年代で、社会民主主義勢力の影響下で、アジア型の日本資本主義をどう北欧型に改革したらよいか問題になりました。二度目が21世紀の小泉政権の時代で、日本資本主義をどうアメリカ型に改革すべきかが議論されたのです。いずれにせよ、モノづくりと配分といった純経済的現象だけに視野を限っていると、このような各国社会の多様性が見えてこないし、資本主義を変貌・修正させてきた原動力も捉えにくくなります。経済学を学ぶばあい、ぜひ人間を24時間ごととらえ、「大地・自然」、「社会」、「政治」、「文化」という視点からも「経済」にアプローチしてほしいと思います。

4. エコ・エコノミーを創ろう

「帰りなんいざ　　田園まさに蕪（あ）れなんとす
なんぞ帰らざる」　　　　　　　　　（陶淵明「帰去来の辞」）
「……変えることのできるものを変える勇気と、変えることのできないものを受け容れる心の優しさと、いずれであるかを見分けることのできる叡智を私に与えてください」
（ラインホルド・ニーバー『平安の祈り』から¹⁰⁾

もともとエコロジーとエコノミーというのは同一のラテン語、オイコス(oikos)から生まれた言葉。オイコスというのは人の棲家(すみか)という意味です。この棲家の性質についての認識をエコロジーといい、その棲家を管理す

る営みのことをエコノミーと呼んだのです。土でできているのか、木でできているのかといった家の性質を理解せずには、家の適切な管理は、できない相談です。エコロジー的な認識を土台にしないとエコノミーの管理は不可能なわけで、一流のエコロジストでなければエコノミストの仕事は務まらないはず。しかるに現代世界のエコノミストたちの大多数は、エコロジーの認識が欠けたまま、棲家の管理に携わっています。ここに現代の不幸の一因があります。

結論を申せば、21世紀が「環境＝イノチの世紀」にならないかぎり、私たち人類の未来はありません。私たちは、じつは「万物の霊長」ではなく「万物の癌細胞^{がん}」にすぎなかったことが露見して、滅んでいくだけでしょ。

環境というのは、36億年も続いてきた地球のなかのイノチの流れのことであり、そのような環境＝イノチのシステム内部の片隅に人間社会が生まれ、そのまた一隅に経済システムが生まれてきたことを、まずしっかりと自覚してください。そのうえで、今日の経済を「エコ・エコノミー」（自然体の経済）の方へと作り変える課題に自発的に（ボランティアに）とりくんでほしいと思います。¹¹⁾

「ボランティア」とはどんな人のことなのでしょう。「言われなくてもする人」というだけでは不十分。「言われてもしない不服従の人」、M. K. ガンジーが実践したように「マイライフ イズ マイメッセージ」といえるような人生を送ろうとする人のことです。

最後にボランティアとして生きる喜びを歌った詩を皆さんに贈ります。「私は眠り、人生は喜びだという夢をみた。私は目覚め、人生とは奉仕だと知った。私は行動し、目をこらす。奉仕は喜びだった」（ラビンドラナート・タゴール¹²⁾）。

「私が生まれたとき、私は泣き、皆が笑った。私が死ぬとき、私は微笑^{ほほえ}み、皆が泣くでしょう」——こんな一生を送れたら素敵だと思いませんか。

注

- 1) シュミット・ブレイク『ファクター10』1997年、シュプリンガー東京。
- 2) デービッド・コーテン『グローバリズムという怪物』1997年、シュプリンガー東京。
- 3) スチュアート・カウフマン（米沢富美子監訳）『自己組織化と進化の論理』

- 1999年，日本経済新聞社，16-17，24，35ページ。
- 4) 佐治晴夫『宇宙の風に聴くー君たちは，星のかげらだよ』1994年，かたつむり社。
 - 5) ウィリアム・クラーク『死はなぜ進化したか』97年，三田出版会。
 - 6) 「36億年の歴史を持つDNAの発する強い力と，たかだか数万年の歴史しか持たない自我との間の葛藤に苦しんでいるのが人間です」（柳澤桂子『意識の進化とDNA』地涌社，1991年，6ページ）。
 - 7) 村上和雄『サムシング・グレートー大自然の見えざる力』1999年，サンマーク出版，136ページ。
 - 8) 高木善之『地球大予測』1998年，サンマーク出版，140-141ページ。
 - 9) 内山節『市場経済を組み替える』1999年，農文協，211ページより。
 - 10) 鈴木有郷『ラインホルド・ニーバーとアメリカ』1998年，新教出版社，139ページ。
 - 11) この点を明らかにした本に，ワールド・ウォッチ研究所創設者のレスター・ブラウン『プランB3.0』（2008年，ワールドウォッチジャパン）があります。また私も，そのための経済改革構想を発表しています。藤岡 惇「持続可能な日本づくりのアジェンダの提案」森岡孝二ほか編『二世紀の経済社会システムを構想する』2001年，桜井書店，参照。
 - 12) 同じことを，アッシジの聖フランチェスコは次のように述べています。「…慰められるよりは慰めることを，理解されるよりは理解することを，愛されるよりは愛することを，わたしが求めますように。わたしたちは，与えるから受け，ゆるすからゆるされ，自分を捨てて死に，永遠の命をいただくのですから」と。

補説

ミミズの幸せから世界平和は始まる

2007年のノーベル平和賞は、地球温暖化問題に警鐘を鳴らしたアル・ゴアさんたちに与えられた。06年度はグラミン銀行を創設したモハメド・ユヌスさん、04年にはケニアの農村女性とともに植林作業に取り組んだワンガリ・マターイさんが受賞された。崩れぬ平和を築いていくには、軍事や外交だけを重視しても限界がある、もっと深部に注目し、平和の経済的ないしエコロジー的基盤を築く営みを重視すべきだというメッセージを選考委員会は送ろうとしたのだろう。

森を造ると雲が浮かび、土壌を肥やすと平和が築ける

第一次大戦前夜にキリスト者の内村鑑三が、『デンマルク国の話』（岩波文庫）という本のなかで紹介した「もみの木の植林」の話をご存知だろうか。

1864年にプロシアとの戦争に敗北したことを契機に、デンマーク国民は覇権戦争に走ることの愚を悟り、「外に広がるのではなく、内を開拓しよう」という道を選び、ユーラン半島北部の不毛の地に植林しようとした。大変な労苦のすえ100万エイカの荒地は豊かな森林に変わっていった。荒地や砂漠のばあい、たまに雨が降っても水分はすぐに地域外に流出していく。これにたいして森林のばあい、雨水は葉っぱや下草に長く留まるので、森の上にはぽっかりと雲が浮かぶ。そうすると雨がよく降るようになるので、気候は温和となり、土壌が肥沃になる。その結果、デンマークは屈指の豊かな酪農国に変貌したのだと内村は説き、満州に進出しようとしていた当時の日本の帝国主義的な風潮に警告を發したのだ。

肥沃な土壌のばあい、一つかみの土のなかに60億を超える微生物が生息している。わずか数十グラムの土壌のなかに、人類の総数に等しい数の微生物が織りなす世界が展開しているのだ。土壌のなかの微生物を栄養源にして大小多様

なミミズが生息するようになると、大量の糞を生み出し、土壌を肥やしてくれる。かつてチャールズ・ダーウィンは、ミミズを「地球の偉大な大腸」と形容したことがあるが、ミミズが大量にいるところでは畑を耕す必要さえ減るといふ。ミミズが無数のトンネルを掘り、土を団粒化し、土壌をふっくらとさせてくれるからだ¹⁾。

健康な微生物が分解した化合物を栄養源とすることで植物が健康となる。この植物を栄養源にすることで健康な動物が生まれ、これら動植物の「いのちをいただく」ことで、心身ともに健康な人間が育まれる。また人間の生存のために不可欠な「人権財」（たとえば水・食物・エネルギー）だけでも自給できるようになると、生存への不安感は減り、国際関係はもっと穏やかで、協調的なものとなるに相違ない。したがって土壌のなかで大量のミミズが幸せに暮らしている国ほど、住民の健康度、社会関係の平和度が高くなっていくのは当然だ。

地球温暖化を防止するために必要なこと

地球圏のなかで炭素はどこに分布しているのだろうか。海洋の炭素固定化作用（二酸化炭素を石灰岩やサンゴ礁に変える作用）をひとまず措くとすると²⁾、いま世界では、固体の炭素が毎年72億トンほど燃やされ、二酸化炭素に姿を変えて大気中に排出されている。

その結果、第1に炭素は7500億トンの二酸化炭素という姿をとって大気中に存在するようになり、大気熱の地球外への放散を妨げ、大気圏の温暖化をもたらしてきた。第2に、炭素は化石燃料（石炭・石油・天然ガス）という姿をとって、地中のなかに4兆トン存在している。第3に、5500億トンの炭素が、地上の植物（樹木や野菜、雑草）という姿をとって固定化されている。第4に、土壌有機物という姿をとって1・5兆トンの炭素が土壌のなかに留まっている。なお注釈を加えると、土壌とは、微生物が大量に生育している地層をいい、地球の表層をごく薄くおおっているにすぎない。地表から1メートル以上の深さに達するケースはごく稀だといふ。

地上の植物群が蓄える炭素の3倍という膨大な炭素が土壌内に存在している

のだ。土壌のなかで炭素の一部は酸素と化合して二酸化炭素、泥土のなかの発酵を介してメタンガスとなっているが、地中に閉じ込められている限り、温暖化を促進することはない。地上の植物のばあいは、平均すると10年後に炭素は二酸化炭素となって放出されるが、炭素が土壌の中に入りこむと、地上よりもはるかに安定的となり、平均すると50年は地中に留まるとい³⁾う。

炭素を大地に戻すための計画

豊かな土壌をつくるにはどうしたらよいのだろうか。まずは落ち葉・稲わら・生ゴミ・糞尿の堆肥化を進め、土に戻す。その上で荒地や遊休地に木を植えていく。住宅を建てるばあいは、材木の地産地消を奨励し、近隣の成木を伐採し、二百年は住める良質な住宅をつくるという運動を展開したいと思う。木造住宅・ログハウスからなる街を造ることは、炭素の固定化という観点からみると大規模な造林事業を行っているのと同じこと。樹齢二百年めざす「都市の森」創生計画だと言い換えてもまちがいではない。

二百年後に家を取り壊したとしよう。その際に大量の廃材が出てくるだろう。廃材は炭にし、細く砕いたうえで、土壌のなかに埋めもどしていこうというのが私の提案だ。炭化しておくことで酸化されにくくなるので、炭素の土壌中の滞留期間は50年より長くなるだろう。炭の表面には無数の穴が開いているので、微生物の格好の棲み家となり、土壌も肥えていくだろう。多様な炭素化合物＝腐植土を豊富に含む土は黒くなる。この作業をとおして、日本の大地を肥沃な黒土地帯に変えていきたいものだ。

私は、もう一つの構想も温めている。廃材などを土壌圏より深い地層に埋め込み貯蔵していこうという計画である。数百年たつと泥炭になるだろう。数万年たつと立派な炭田、数百万年たつと立派な油田が復活してくるかもしれない。エネルギー不足に見舞われたときには掘り出して使うことができるので、「エネルギーの安全保障」にも役立つだろう。

炭鉱の坑道跡や油田の底に二酸化炭素をポンプで送りこみ、長期間封じ込めようという計画が進められているやに聞く。この種の計画のばあひ、実現する

には莫大なコストがかかるだけでなく、周辺の生態系に悪影響を及ぼす危険があるし、土壌を肥やす役割もはたさない。このような高価で危険な計画よりも、堆肥づくりを進めたり、廃材を土壌に戻していくほうが優れており、夢があるように思うのだが、いかがであろうか。すでに日本の関西電力は、インドネシアの現地植林会社と協同して、廃材を炭化して、できた炭を土壌改良剤として土地に戻す計画をもっているという。⁴⁾

動物が幸せになると人間も幸せとなり、経済も繁栄する

動物が野生のなかで本来の幸せを実現しているシーンを見ると、人間も幸せな気分になっていくものだ。その証拠が北海道旭川市立の旭山動物園の事例であり、兵庫県豊岡のコウノトリの郷文化公園ではないだろうか。渡り鳥のコウノトリが再び飛来してくれるよう、有機農業に徹し、農薬を使わない農村づくりをしようと豊岡盆地の農民たちは決意した。コウノトリが幸せになる地域づくりに励むことで、人間も幸せになれる。そうすると観光客の心の琴線に触れるので、経済的にもペイするという好循環が、豊岡の地に生まれ始めたように思われる。⁵⁾

むかし「労農同盟」（労働者と農民の同盟）という言葉があった。21世紀という時代は、この「労農同盟」という言葉の皮袋に新しい内容を盛り込む時代になるのではないだろうか。「生き物と死に物」「農村と都市」の同盟を介して、自然体の体をとりもどし、心身をエコロジーと文化のなかに埋め込んでいき、大地と宇宙に根を下ろしていく生き方を実践する時代になるであろう。⁶⁾

漫談家の綾小路きみまろさんは、富士山麓で始めた家庭菜園づくりの体験について、つぎのように語っている。「東京では、人の顔色をみながら、『どうやって生きようか』ってなるけど、田舎では、ミミズの顔を見て、『おれは生かされているんだ』、『どうやって死のうかな』って考えられる」と。⁷⁾「都会の銀行に預金がある安心感とは質の違う、大地に生かされているという根源的な安心感」（きくち・ゆみ）を培っていけるタイプの経済学、「自然を崇敬する唯物論」の立場にたった経済学こそが求められているのであろう。

自然・イノチを崇敬する唯物論の大切さ

2050年までに二酸化炭素の排出量の半減を実現するためのもっとも実り豊かな方策の一つは、炭素を土壌のなかに固定化していくことだと述べてきた。日本の土壌のなかの炭素含有比率を大幅に引き上げていく「国土の黒土化」年次計画を策定することがまず必要だろう。そのための国民的キャンペーンを先導し、持続可能で平和な社会経済を築いていくためには、どのような質の哲学と経済学が必要なのであろうか。

自然・宇宙の壮大な進化発展の姿をつかめず、生き物と死に物との区別さえつかない「機械的唯物論」では、到底その任には耐えられないであろう。

他方、近代の経済学は、人間をエコロジ的な土台や社会・歴史の枠組みから切り離し、類（人類・生物）と累（祖先と子孫）から孤立した「近代個人モデル」という枠組みのなかで捉えようとした。そのため大地・自然が人間を生み出し、「いのち」（身体）が精神（脳・自我）を生み出し、「イノチ」が「私」を生きているにもかかわらず、あたかも人間のほうが大地・自然を所有・支配し、精神（脳・自我）のほうが「イノチ」（身体）を所有・支配しているかのように考えてきた。

また人間（自己）とは、「正しいから行動する」という倫理的動機と「得するから行動する」という経済的動機の二本柱で行動するものであり、そのばあいの「自己」の範囲も、人間的発達のレベルに応じて、大きくも小さくもなる。人間的発達のレベルが高くなると、「自己」の範囲は、「孤独な脳」から身体、家族、一族郎党、地域社会、民族、国民、人類、生物界、地球といったレベルに拡張し、「自我」は「小我」から「大我」へと発展していくものだ。しかるに近代の経済学は、自我の発展を「小我」というレベルに固定し、「自分だけ、今だけ、お金だけ」というレベルで行動する「経済人モデル」が実際に成立するかのようには仮定して、経済理論を組み立ててしまった。

自分の脳を主軸として世界は回っているかのように考えるこのような天動説的な観念論と経済への還元主義という二重の誤りを克服していくことが、持続可能な経済社会を築いていくために不可欠だと、私は考える。言い換えると私

（自我・脳）がイノチをもっているという観念論的観点から、イノチ（客観的な自然史のなかのイノチの流れ）が私として存在している（イノチが私を生きている）という唯物論的観点に転換することが必要なのだ⁸⁾。

弁証法的唯物論を「自然・イノチを崇敬する唯物論」に鍛え上げ、そのような宇宙観・人間観に立脚した経済学を構築していきたいものである。

注

- 1) 中村方子『ミミズに魅せられて半世紀』2001年、新日本出版社
- 2) 毎年大気圏に排出される72億トンの二酸化炭素のうち約20億トンは海洋に吸収され、海洋中のカルシウムと化合して炭酸カルシウムとなり、海底の石灰岩やサンゴ礁に姿を変えて蓄積されているという。竹村真一『Water 水』2007年、ワールド・フォットプレス、78ページを参照。
- 3) 詳細は、木村真人ほか編『土壌圏と地球温暖化』2005年、名古屋大学出版会を参照。
- 4) 『朝日新聞』2002年9月13日付け。
- 5) 菊池直樹『蘇るコウノトリ——野生復帰から地域再生へ』、2007年、東京大学出版会を参照。
- 6) この点の大胆な提起は、小貫雅男・伊藤恵子『森と海を結ぶ菜園家族』2004年、人文書院、『菜園家族21』2008年、コモンズ。
- 7) 『朝日新聞』2007年5月20日付け。
- 8) サティシュ・クマール（尾関修ほか訳）『君あり、故に我あり—依存の宣言』2006年、講談社学術文庫。